

目 次

比 企 一 族 の 歴 史

1. テーマの選定理由
2. 比企氏の起こりと源氏との繋がり
 - 2-1 比企氏の起こり
 - 2-2 比企氏と源氏との繋がり
3. 比企の尼とゆかりの人々
 - 3-1 比企一族と関係略系図
 - 3-2 比企の尼と頼朝
 - 3-3 比企の尼と範頼
 - 3-4 比企の尼と子供達(三人の娘)
4. 鎌倉幕府と比企氏
 - 4-1 鎌倉幕府の成立
 - ①源頼朝の挙兵と平家滅亡
 - ②1180年から1203年の主な年譜
 - ③鎌倉幕府の仕組み
 - 4-2 源氏と比企一族との関わり
 - ①比企遠宗夫妻
 - ②比企朝宗
 - ③姫の前
 - ④比企能員・若狭の局
5. 頼朝の死から比企の乱まで
 - 5-1 頼朝の死と有力御家人13名による合議制
 - 5-2 比企能員の変(比企の乱)
6. その後の比企氏とゆかりの地を訪ねて
 - 6-1 その後の比企氏
 - ①竹御所
 - ②比企能本
 - ③仙覚律師
 - ④島津忠久
 - 6-2 比企氏ゆかりの地を訪ねて
 - ①妙本寺(鎌倉市)
 - ②金剛寺(川島町)
 - ③慈光寺(ときがわ町)
 - ④正法寺(東松山市)
 - ⑤安楽寺(吉見町)
 - ⑥宗悟寺(大谷)
 - ⑦遠宗と比企尼の館跡(滑川町)
7. 伝承と伝説
 - 7-1 大谷①比丘尼山と寿昌寺跡
 - ②城ヶ谷と比企能員館跡
 - ③梅ヶ谷と若狭の局
 - ④伝説「若狭の局と串引沼」
 - 7-2 岩殿①判官塚
 - ②伝説「くつわ虫」
8. まとめ・課題研究を終えて
9. ご協力者・訪問施設・参考文献
10. 郷土学部B班活動記録

1. 「テーマの選定理由」

鎌倉幕府の成立に欠く事の出来ない比企一族の存在、特に比企の尼の功績は、偉大なものであった。しかし比企氏を継いだ能員は、鎌倉幕府で重職の地位にありながら、その存在は余り知られていない。同じ時代に活躍した熊谷直実や畠山重忠に比べ、比企能員の名は左程ではない。歴史上に名を留める事、四十有余年にして比企氏が消滅した事は非常に残念な事であり、私達の住む東松山は、比企一族にまつわる伝承が数多く残る処でもある。私達は、今こそ比企一族の生きた証しを甦らせ、我々の先人を再発見し、多くの人々に伝えられる様学んで行きたいと思い、課題研究のテーマとした。

2. 「比企氏の起こりと源氏との繋がり」

2-1 比企氏の起こり

比企一族に関する資料は少なく、不明なことが多い中で比企一族に関連する場所、伝承等が発見され見聞することが多くなった。さて、川島町の清月山元光院金剛寺所蔵の比企氏系図から、比企氏の祖を探求できるのではないだろうか。

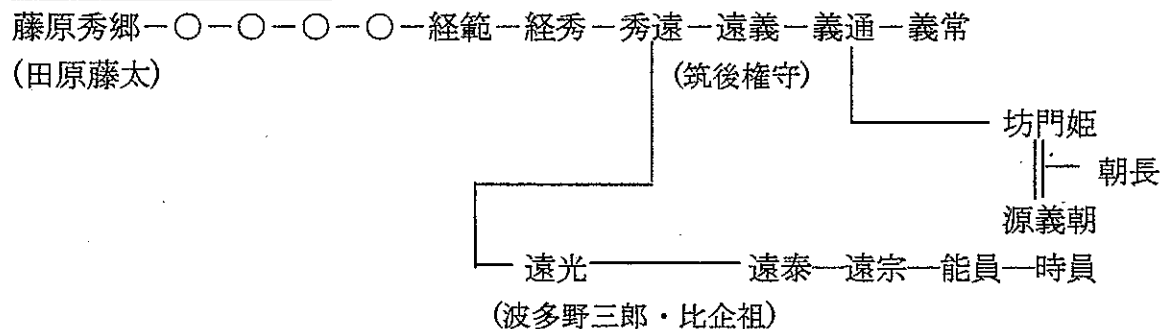
金剛寺のある一帯は、比企氏の館があった可能性があり、比企一族の墓もある比企氏ゆかりの寺である。比企氏は、俵藤太(または田原藤太)こと藤原秀郷の末裔を称する武蔵の豪族である。秀郷が田原藤太と呼ばれるのは、はじめに相模国田原を領したからである。現在の秦野市東田原・西田原である。比企氏の祖とされている波多野三郎遠光はその一族である。尚、この一族は、絹織物や製鉄等の高度な技術を持った渡来系の流れをくむ民族であったと言われている。

波多野氏は、前九年の役で活躍した波多野^{つねのり}経範が祖とされ、河内源氏の源頼義の家人として仕えていた。経範の父が源頼義の相模守補任に際して、その目代となって相模国へ下向したのが波多野氏の起こりと考えられている。

その家系は、代々中央への出仕を続けており官位を得ていた。遠光の父秀遠は、鳥羽院蔵人所衆として仕え、「千載和歌集」に藤原成親の名で歌を残す教養人であった。

康和二年(1100)秀遠の三男波多野三郎遠光は、比企郡司として京より下り、比企郡に移り住み土着して比企氏を併用したとされている。

比企氏の祖・波多野氏



2-2 比企氏と源氏との繋がり

比企氏の祖と言われた波多野三郎遠光の孫遠宗は、若くして京に上り源為義・義朝父子に仕えた。

久安元年(1145)義朝の御家人であった遠宗は、誠実な人柄を見込まれて、義朝と熱田神宮の大宮司藤原季範の娘との間に頼朝が生まれると、遠宗夫妻は乳母夫に選ばれた。(遠宗夫妻は藤原氏の出身であり、また、熱田大宮司の娘も藤原氏の出身であったからであろう)。

頼朝の乳母には、比企氏の他に東国の大豪族小山政光の妻をはじめ、山内経俊の母、三善康信の叔母など7人であったという。

保元元年(1156)に起こった保元の乱は、皇位継承問題や摂関家の内紛により、朝廷が後白河天皇方と崇徳上皇方に分裂し、双方の武力衝突に至った政変であったが、義朝は後白河天皇方につき、為義は崇徳上皇方についた事により父子の戦いになり、結果は為義方が敗れ為義等は処刑された。

この戦いで遠宗は義朝方として参戦し勝利したが、遠宗としては、旧主為義との戦いはさぞかし複雑な心境であったことが伺える。為義の処刑の知らせを聞いた後、「岩殿山正法寺」に籠り、為義の菩提を弔い観世音像を彫り、その冥福を祈ったと言われている。

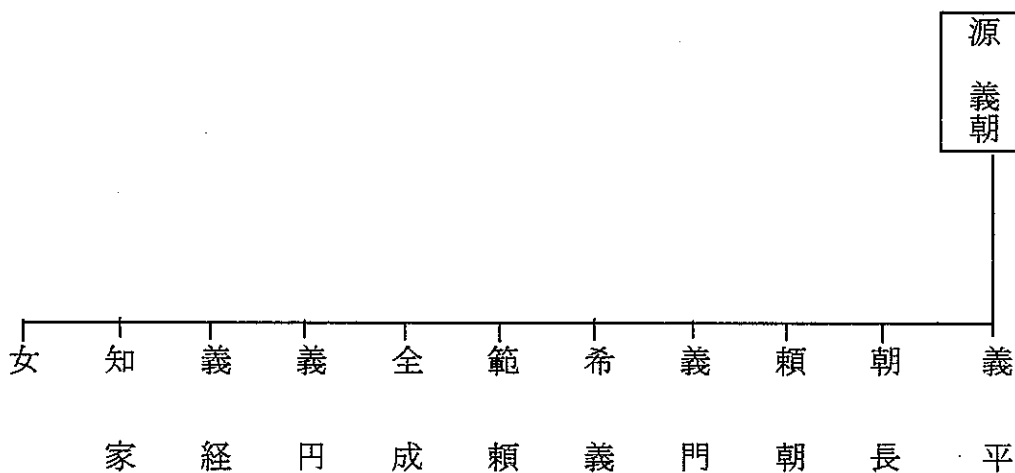
保元の乱(1156・7)・相間図

<u>勝者側</u>	VS	<u>敗者側</u>
(天皇の勢力)		(上皇の勢力)
後白河天皇		崇徳上皇
藤原忠通		藤原頼長
平 清盛他		平忠正他
源 義朝他 (比企遠宗)		源 為義 為朝

平治元年(1159)平治の乱が起こった。後白河上皇(二条天皇に譲って上皇となった)は藤原信西を重用し、信西は政治の実権を握るようになる。一方で後白河上皇は、藤原信頼という寵臣もいた。二人は権力を争うようになり、信頼は源義朝と結託して信西を殺害し、後白河上皇と二条天皇を幽閉してしまう。この襲撃は信西とも親しかった平清盛の留守を狙って行われていた。平清盛は京に帰ると、後白河上皇と二条天皇を保護した後、クーデター勢力を破り、藤原信頼と源義朝をそれぞれ処刑・殺害した。

平治の乱(1159.12~1160.3)相聞図

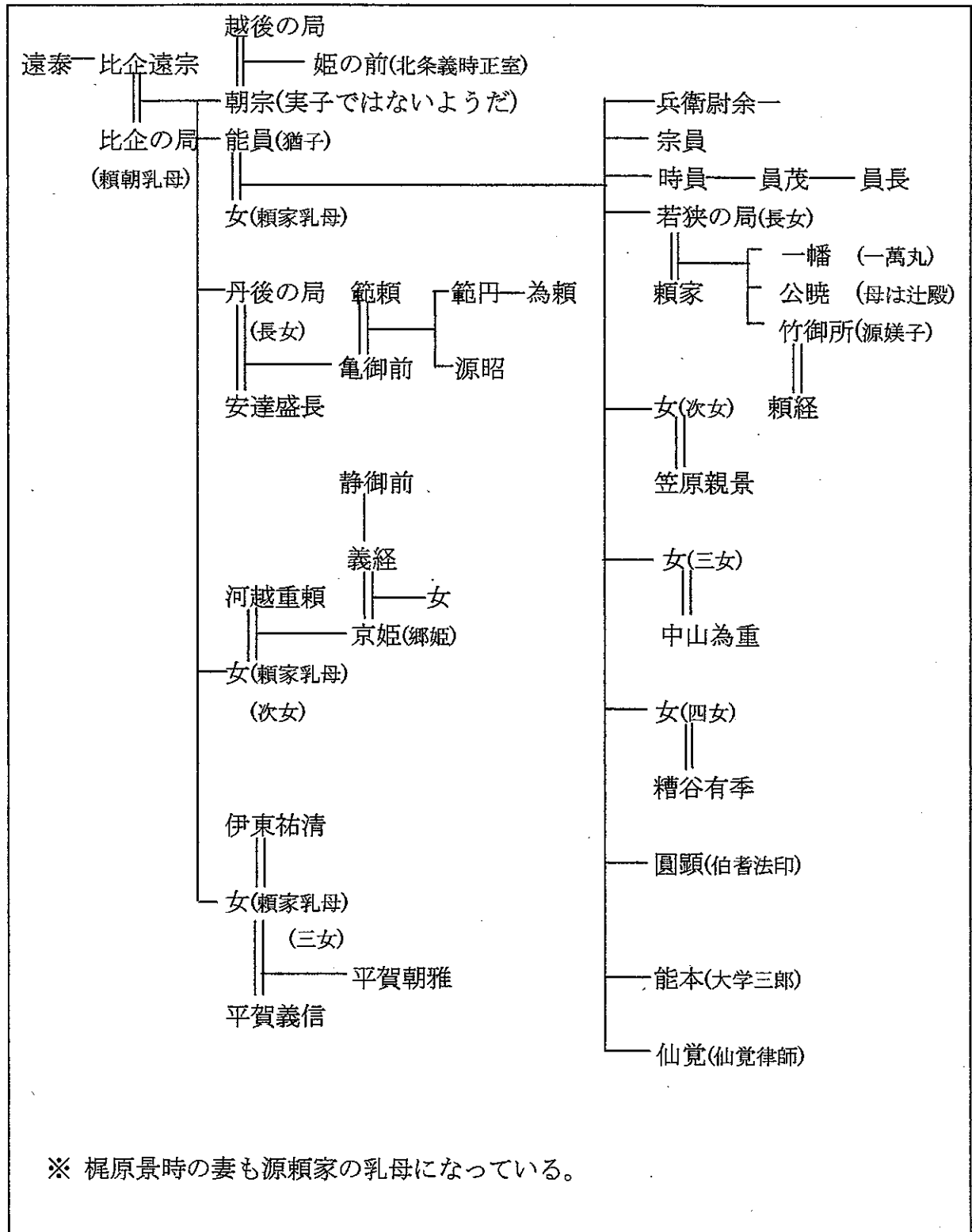
<u>勝者側</u>	VS	<u>敗者側</u>
(上皇・天皇の勢力)		(クーデター勢力)
後白河上皇		藤原信頼
二条天皇		源 義朝
藤原通憲(信西)		源 義平
平 清盛他		源 頼朝 (比企遠宗)



注: 義朝の子供達(十男一女)。

3. 「比企尼とゆかりの人々」

3-1 比企一族と関係略系図



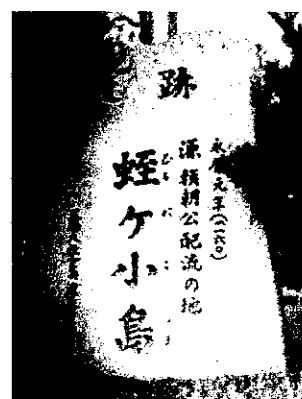
3-2 比企の尼と頼朝

比企の尼は、比企郡の郡司であった掃部允比企遠宗^{かもんじょうひきとおむね}の妻で比企の局と称し、夫遠宗没後、尼となり、晩年仏門に入ってから比企禅尼と称するようになったと伝えられているが、出生没年は明らかにされていない。(1120年代の生まれとされている)。

夫比企遠宗は義朝の御家人として信頼厚く、久安三年(1147)義朝に熱田神宮の大宮司藤原季範の娘(由良御前)との間に三男頼朝が誕生するにあたり、比企の局は乳母に選ばれ、乳人となった夫遠宗と共に上洛することとなる。

乳母に選ばれるということは、将来に渡りその子(頼朝)の養育にも深く関わる事で、比企の局及び比企一族が良質な家風とある程度の財力もあるという、好条件に叶っていたものと思われる。

平治の乱で源氏が敗れ、当時 13 歳の頼朝は、嫡子であるがため処刑されるどころ、平清盛の義母池の禅尼の懸命な命乞いによって助けられ、伊豆の蛭ヶ小島で流人の身となる。



蛭ヶ小島

治承四年(1180)源頼朝が 33 歳で平家打倒の旗揚げをする迄の 20 年間、頼朝を助ける人は少なかった。比企の局は夫遠宗と共に比企地方の詰所に戻り、流人頼朝を生活の質だけでなく、一切の面倒を見たと言われている。その間に夫遠宗は亡くなり、尼の妹の子能員を養子に迎え猶子とし、能員初め実子の三人の娘達を関東の豪族に其々嫁がせ(後に詳述)、その婿達は比企の尼の手足となり、比企一族で頼朝を支えたと言われている。

長い間の援助が続けられたのは尼自身にも財力があり、また、詰所の比企地方で鉄・銅・馬・米等が産出され、豊かであったことがあげられる。

乳母として奉仕すると云う事は、養育する子が何れ成人し、しかるべき地位に就いた時に、一族が第一番に所領や権力を与えられる為と思える。

しかし、その時世は平家全盛時代のこと「平家にあらずんば人にあらず」と言われている時代であり、流人である頼朝が世に出る見込みなどほとんど考えられない中で、平家の監視を潜り抜けながら、尼は報いられることのない奉仕を 20 年に亘って続けたという事になる。

それは何故なのか、尼の誠実さによるものか、頼朝への深い母性愛によるものか、様々考えさせられるところである。比企の尼は強い意志を持った才能のある女性であったと思われる。

治承四年(1180)頼朝は挙兵し、鎌倉を本拠地とした際、一等地と言われた比企ヶ谷(現在の妙本寺)の地に尼を迎えて長い間の恩に報いた。

一族もまた鎌倉幕府の中で、頼朝の側近として厚遇されることとなる(尼はこの頃50歳の前半ではないかと考えられる)。

頼朝は、この比企ヶ谷の館に政子と共によく訪れ、季節毎の宴などを催したようである。頼朝の長男頼家も比企ヶ谷の館で誕生し、能員の妻と尼の二女と三女が頼家の乳母となり、母子二代に渡り源家嫡流の乳母を務めたと言う事になる。

頼朝の尼への感謝の思いは最後まで変わらず、比企の尼の存在は、鎌倉幕府が成立存続する上において大きな力に成ったと考えられる。

3-3 比企の尼と範頼

比企の尼は、伊豆の頼朝だけでなく、源義朝の六男(頼朝の異腹の弟)源範頼も庇護している。平治の乱の時、範頼は6歳だったと伝えられている。

当初は、公卿の藤原範季に助けられ、その後比企地方の吉見(現在の岩殿山安楽寺)に稚児僧として預けられ、比企一族の援助のもと成人するまで庇護されたと言われている。

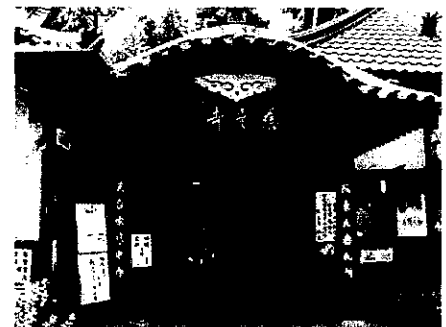
寺の近くに館を構えて(現在の息障院)吉見御所と称されるようになる。範頼が弟の義経と共に平家追討のため西国で戦ったおり、比企一族は範頼の配下として参戦し戦功をあげている。



安楽寺



息障院



慈光寺

建久四年(1193)範頼は、頼朝の伏罪にあつて伊豆に幽閉され自刃させられると、範頼の二人の遺児は、比企禅尼や丹後の局の願いによって助命され、慈光寺に庇護され出家し別当となり、範円・源昭のりかず もとあきと称した。

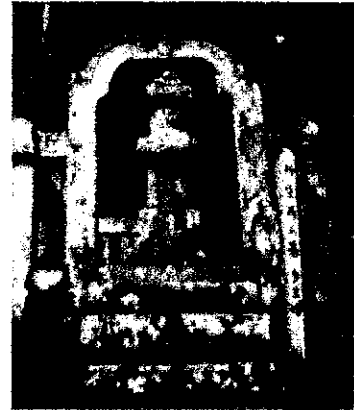
その後範円の子の為頼は、比企禅尼に吉見の庄を貰い、吉見三郎為頼と号して吉見氏の先祖となったと伝えられている。吉見の庄は比企の尼の所領の一つと言われている。

3-4 比企の尼と子供達(三人の娘)

比企の尼には、男子が無く実子は娘三人とされている。家督は甥(自分の妹の子)の能員に継がせる。能員は比企の尼の「めがね」に適う能力のある人物であったと思われる。

長女・・・丹後の局

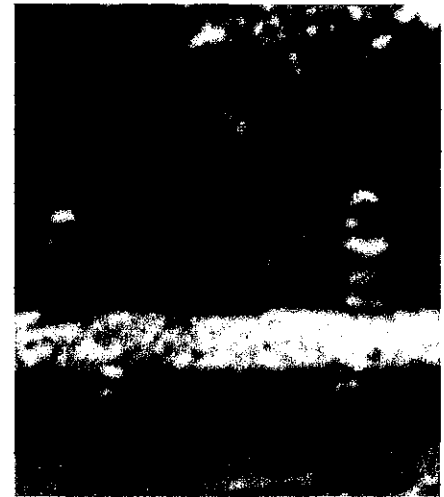
頼朝の流人時代から身の回りの世話をし、常に身近に居た為、男女の関係だった可能性があり、男子を出産している。(島津氏の祖となった島津忠久である)。(父親については、他説もある)。その後、頼朝に古くから仕えていた御家人安達盛長に嫁し、亀御前を生み、範頼の室とする。因みに、丹後の局の墓は、鹿児島市花尾町にある花尾神社の側に祀られている。



丹後の局の墓

二女・・・比企の豪族河越重頼の室となる。

二人の間には、三人の男子と二人の女子が生まれる。頼家誕生の時は乳母となり、最初の御乳付けを行ったと伝えられている。末娘京姫(比企の尼の孫)は、源義経の室となり奥州平泉で義経と共に亡くなっている。頼朝が義経を追討することになると河越重頼は義父であると言う事で、長男と共に誅せられている。所領も全て没収されるが、頼朝と比企氏の関係から河越氏の領土は2年後には、重頼の妻(比企の尼の娘)に返却されることとなる。重頼の二男、三男も許されて河越氏は存続する。比企の尼も存命中だったと考えられる。



川越市養寿院境内の河越重頼の墓

三女・・・伊豆の豪族伊東祐清に嫁す。夫伊東祐清は頼朝挙兵の時は父祐親に従い平家方として戦い戦死する。後に信濃を拠点とする源氏一門の平賀義信(後の武蔵守)に再嫁し、頼家の乳母の一人となる。夫平賀義信は頼朝没後も源氏一門の重鎮として重きをなした。

4. 「鎌倉幕府と比企氏」

4-1 鎌倉幕府の成立

①源頼朝の挙兵と平家滅亡

治承四年(1180)伊豆に流されていた頼朝は、平家打倒の為挙兵したが、石橋山の戦いに敗れて安房に逃げ、そこで武蔵広常・千葉常胤の支持を獲得し、瞬く間に大勢力となり、先祖ゆかりの地である鎌倉に入り本拠地とした。

また、関東武士団を統率するための侍所を設置し、頼朝は鎌倉殿と称されるようになった。

東国の支配権を確立していった頼朝は、寿永三年(1184)行政を担当する公文所(後の政所)と司法を担当する問注所を設置し政権の実態を形成していった。

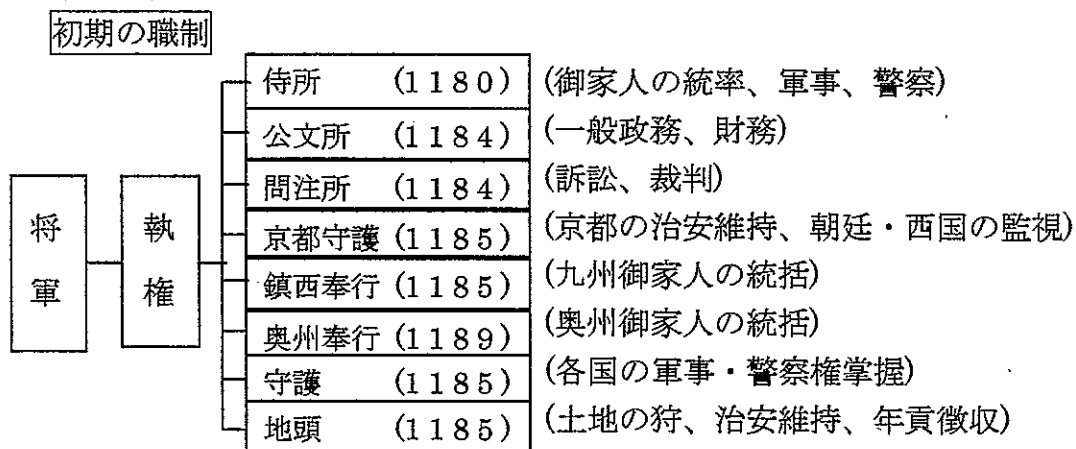
寿永四年(1185)壇ノ浦の戦いで平家を滅ぼし、朝廷から守護・地頭の任命権を承認させ鎌倉幕府(頼朝政権)を成立した。

文治五年(1189)頼朝は、奥州合戦で奥州藤原氏を滅ぼし、建久三年(1192)征夷大將軍に任命され鎌倉幕府(武家政権)の形成が完了した。鎌倉幕府は、元弘三年(1333)に滅亡するが、この間約 150 年を鎌倉時代と言う。

②治承四年(1180)～建仁三年(1203)の主な年譜

- 治承四年(1180) 頼朝挙兵 鎌倉を拠点 侍所設置(武士支配機構)
- 寿永元年(1182) 政子 比企能員の館で頼家出産(能員・頼家の乳母人に)
- 寿永三年(1184) 公文所、問注所設置(行政、裁判機構)
- 寿永四年(1185) 平家滅亡、守護、地頭の設置、鎌倉幕府の成立
(鎌倉幕府はここで成立と解釈されている)
- 文治五年(1189) 奥州制圧 奥州藤原氏滅亡(比企能員、朝宗奥州征伐に参戦)
- 建久三年(1192) 頼朝征夷大將軍になる
- 正治元年(1199) 源頼朝死去(53 歳) 頼家家督相続
- 建仁三年(1203) 比企能員の変(比企の乱)

③鎌倉幕府の仕組み



4-2 源氏と比企一族との関わり

①比企遠宗夫妻

遠宗夫妻は若くして京に上り為義・義朝に仕え、頼朝が生まれると乳夫人となる。これがのちのちの頼朝との絆の原点のようだ。その後平治の乱で源氏が敗れると比企郡に戻り詰所を与えられ掃部充かもんじょうを号しますが、まもなく戦乱の傷から死去します。この後、その夫人が比企の尼と称し、一族の発展へと繋がっていきます。

②比企朝宗

朝宗は、系図上は比企遠宗と比企の尼の実子、または兄弟とされるが正確な続柄は不明である。比企の尼に連なる比企氏の一族であるようだ。

頼朝の臣従として治承・寿永の乱に参戦し、何度か頼朝の使いとして上洛もしている。寿永三年(1184)木曾義仲滅亡後、北陸道勸農使として派遣され、また若狭国・越前国・越中国・越後国・佐渡の五ヶ国の守護職を拝した。戦乱に拠って途絶した年貢の納入を朝廷に約束したので、生産基盤の安定化と輸送ルートの安全確保は重要課題であった。木曾義仲は兵糧米として大量の米を徴発した為、義仲が支配した北陸道の安定化と云う重要な仕事を命じられたのである。

寿永三年(1184)範頼の平家討伐に従軍、文治二年(1186)義経の郎党探索、文治五年に奥州合戦に従軍した。建久五年(1194)越前国の領地横領で訴えを起こされ、これを最後に朝宗の記録は消えている。

③姫の前

朝宗と妻(越後の局)の間には才色兼備と言われた娘(姫の前)がおり、「吾妻鏡」には、当時権威無双の女房なり、容顔ただ美麗にして頼朝公の御意に相叶うと記されている。北条義時は、一年余りの間姫の前に恋文を送っていたが一向になびかず、それを見かねた頼朝が、義時に「絶対に離縁しません」と云う起請文を書かせて、ふたりの間を取り持ったと云う。(日本で最初の結婚誓約書)こうして建久三年(1192)姫の前は義時に嫁いだと云う。

また、「明月記」によると、姫の前は比企の乱の直後に義時と離別して上洛し、源具親ともちかと再婚して輔通すけみちを産んだ(元久元年 1204)ものと見られる。「明月記」承元元年(1207)に、前日に源具親少将の妻が亡くなった事が記されており、姫の前は再婚後3年程で京都にて死去している。

④比企能員・若狭の局

比企の尼は夫・遠宗の死後、甥の能員を養子にし、猶子として比企家の家督を継がせた。比企能員は比企の尼の推挙により、頼朝の側近として仕え稀に見る厚遇を受けた。

寿永三年(1184)木曾義仲残党討伐のため信濃国に出陣し、8月に平家追討にも従軍した。

寿永四年(1185)奥州藤原氏との合戦には北陸道大將軍として、建久元年(1190)第二次奥州合戦には東山道大將軍として出陣をした。能員は、上野国・信濃国の二ヶ国の守護にも任命されている。

寿永元年(1182)鎌倉比企ヶ谷の能員の館にて、北条政子が頼朝の嫡男万寿(頼家)を出産し、能員は頼朝の信任を受け頼家の乳母人となった。

建久九年(1198)比企能員の娘・若狭の局が頼家の側室となり、嫡男一幡を生むと能員は將軍の外戚として權威を振るった。

正治元年(1199)1月頼朝が死去し、頼家が18歳で二代將軍として後を継ぐが3ヶ月後有力御家人による13人の合議制がしかれた。能員もその一人である。

建仁二年(1202)若狭の局は、娘・竹御所を出産した。(竹御所については後述)

5. 「頼朝の死から比企の乱まで」

5-1 頼朝の死と有力御家人13名による合議制

正治元年(1199)1月頼朝が亡くなると、それまで盤石の地位を築いていた比企一族に対し、北条政子を筆頭とした反比企勢力の動きが活発となる。

それまで独裁色が強かった頼朝体制だが、それを引き継いだ二代將軍頼家から、僅か3ヶ月で決済能力無しと云う理由で、母北条政子により訴訟裁決権を停止される。

そして有力御家人13名による合議制へとその政治体制を変化させる。一説には、これは北条時政による策略とも言われている。

鎌倉幕府創設時、北条氏の地位は妻政子の実家ではあるものの、頼朝を支える有力御家人の一人に過ぎない。

それに比べ比企氏は、頼朝不遇の時代より長きに亘りその生活を支えた。その功績は、後の源氏一族に対し比企氏の在り方に大きな影響を与えたと考えられる。

それはやがて比企氏と北条氏の対立を生む要因となったのではないだろうか。



源頼朝の墓



鎌倉鶴岡八幡宮

有力御家人（宿老） 13名による合議制

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| ① 北条時政・初代執権、頼家外祖父 | ② 北条義時・二代執権、時政嫡男 |
| ③ 大江広元・政所別当 | ④ 三善康信・問注所執事 |
| ⑤ 中原親能・政所公事奉行 | ⑥ 三浦義澄・三浦義明嫡男 |
| ⑦ 八田知家・源義朝十男 | ⑧ 和田義盛・侍所別当(1213年滅亡) |
| ⑨ 比企能員・頼家の乳母夫(1203謀殺) | ⑩ 安達盛長・比企尼娘婿 |
| ⑪ 足立遠元・足立氏の租(盛長の甥) | ⑫ 梶原景時・頼家乳母夫(1199年追討) |
| ⑬ 二階堂行政・政所執事 | |

☆合議制は執権体制に変わった後も、評定衆(11名)と言う形で残る。

此処で最初に行われたのが、幕府侍所(軍部)の長官でもある梶原景時を追い落とす事だった。合議によって幕府からの追放を決めると、正治二年(1200)梶原景時は討たれる。景時はかなりの野心家だった様で、一番初めに時政から警戒されたのだと思われる。その後次々と北条氏の画策によって、13人体制は崩されて行くのである。その一つがこれから述べる比企の乱と思われる。

5-2 比企能員の変(比企の乱)

建仁三年(1203)7月、二代将軍頼家が病に倒れたのを契機として、翌8月には危篤を理由に家督継承の処置が取られる。

その内容は下記の通り

頼家の嫡男^{いちまん}一幡(一萬丸) 関東 28カ国の地頭並びに総守護職。

頼家の弟^{せんまん}千幡(実朝) 関西 38カ国の地頭職。

この分割案に異議を唱えたのが比企能員である。

「吾妻鏡」に拠れば、比企能員が娘の若狭の局を通し、頼家に北条時政を討つ様に勧めたとある。その謀を、障子の陰で北条政子が立ち聞きし、直ちに父時政へ知らせたと言う。知らせを聞いた時政は、大江広元等(史僚)の同意を得て、能員征伐を決意したとある。



比企能員館跡(妙本寺)



比企一族供養塔

建仁三年(1203)9月2日、北条時政邸で比企能員が討たれると、すかさず比企一族は小御所に立て籠もるも、北条義時を総大将とする討手により、嫡男一幡と共に滅び去る。

その後北条一族は、有力御家人を次々と倒し、幕府内に盤石な地位を築くと、得宗家を中心とした執権政治へと移行して行く。

今に残るこれらの史実は、北条氏の下で監修された「吾妻鏡」によるものが中心の為、その真偽に多少疑いは残るものの、ほぼ史実を正確に伝えているものと思われるが、「愚管抄」「玉葉」等公卿の文書と比較しながら検討の余地があるのも事実である。



一幡の袖塚

6. 「その後の比企氏とゆかりの地を訪ねて」

6-1 その後の比企氏

①竹御所(源嬖子)

二代将軍源頼家、三代実朝亡き後、鎌倉幕府は京の九条道家の母が頼朝の縁戚に当たることから、執権の北条義時より三男の三寅(藤原頼経)を第四代将軍に要請する。

道家はこれに応じて承久元年(1219)三寅(2歳)を鎌倉に下向させた。その後、承久の乱をはさんで、6年後の嘉禄元年(1225)元服し頼経と名乗る。翌嘉禄2年将軍宣下により鎌倉幕府の四代将軍となる。寛喜二年(1230)二代将軍・源頼家の娘で15歳年上の竹御所(源嬖子)を妻に迎える。これで尼将軍北条政子の死去後実質的な政子の後継者となる。幕府関係者の中で唯一頼朝の血筋を引く竹御所は、幕府の権威の象徴として執権北条方及び御家人の尊敬、信頼を得たのです。それにより比企一族の復権、復興が許された。夫婦仲は円満であったと伝えられる。その4年後に身籠り、頼朝の血を引く将軍後継者誕生の期待を周囲に抱かせるが、難産の末、男子を死産、竹御所本人も33歳で死去、これにより頼朝の血筋は途絶えた。

②比企能本

能本は比企能員の末子で比企の乱時、竹御所と共に当時2歳で助けられ、その後上京し儒者となって都で順徳天皇に仕え、竹御所死去後比企氏再興が許されたことにより、能員屋敷跡の比企ヶ谷に法華堂を創建した(妙本寺の項で後述)。

③仙覚律師

仙覚の母は比企能員の内室で、比企の乱の年に常陸国(今の茨城県)で仙覚を産んだ。幼い時から聡明で、13歳で万葉集の研究を志した。寛元四年(1246)正式に四代将軍の命を受け万葉集の研究に生涯を捧げることになるが、晩年は鎌倉を離れ祖先の地(現在の小川町)に移り住み「万葉集注釈」を完成させた。この功績で「万葉集の祖」として現在も尊敬されている。

④島津忠久

文献及び島津氏の史料「島津国史」「島津氏系図」によれば、「島津氏の祖」である忠久は比企の尼の長女である丹後内侍(丹後の局)と源頼朝の間に産まれたとされている。(忠久出生には他説がある)。

鎌倉時代から明治維新まで長年に亘り活躍した名家島津家に比企氏の血が流れていたのであろうか。

6・2 比企氏ゆかりの地を訪ねて

「比企氏のゆかりの地を訪ねて」は「課題研究」の重要課題である。下記に示す「ゆかりの地」はグループ全員で訪ね、全員目で確認し当該関係者より懇切丁寧に説明を受け理解に努めた次第である。

①妙本寺(鎌倉市)

比企能員の末子能本が、「比企氏の乱」で死亡した能員夫婦及び比企一族の菩提を弔う為、日蓮上人を開山とし法華堂を創建した。これが日蓮宗最初の寺で、後、長興山妙本寺と称した。長興とは能員、妙本とは能員夫人の法名である。

境内には比企一族の供養塔、若狭の局の霊を祀った「蛇苦止明神」、頼家の嫡男一幡の袖塚、四代将軍頼経の正室竹御所(源嬖子)の墓等がある。



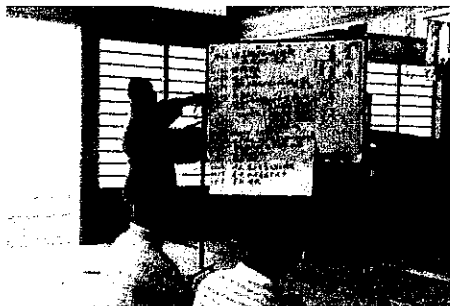
蛇苦止明神



竹御所(源嬖子)の墓

②金剛寺(川島町)

金剛寺は真言宗智山派、開山は不詳であるが天正年間比企能員の末裔が比企左馬助則員が中興したと伝えられている。妙本寺(鎌倉)同様、比企一族の菩提寺である。この金剛寺には重要な「比企系図」及び比企家 15 代則員、16 代義久、17 代重久、18 代久員を含む歴代の墓がある。



金剛寺住職さんの解説



比企氏系図

③慈光寺(ときがわ町)

慈光寺は天台宗の名刹で奈良時代に鑑真和上の高弟、釈道忠の創建によるもので、源頼朝及び比企氏と縁のある寺である。頼朝は挙兵に先立ち、比企の尼の長女の夫である安達盛長を御使者として銅鐘を寄贈、また、奥州藤原氏討伐の折は、「愛染明王像」を寄贈、守り本尊とし戦勝祈願をしている。その時の北陸道大將は、比企能員である。また、源範頼伊豆にて自涯の時二男、三男は比企の禅尼・丹後の局による嘆願にて助命され慈光寺に庇護され出家し別当となり範円・源昭と称した事は先にふれた通りである。



慈光寺本堂にて



慈光寺観音堂

④正法寺(東松山市)

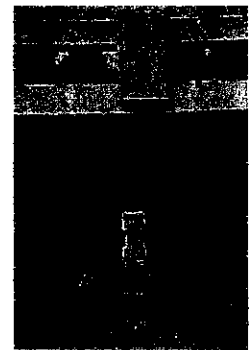
岩殿山正法寺は奈良時代初期、真言宗智山派の寺院で鎌倉時代初期に源頼朝の命で比企能員が復興し、頼朝の妻政子の守り本尊と伝えられている。

また、比企判官である能員の追福の為「判官塚」があり、「比企明神」が祀られている。比企の乱の時、能員の嫡男時員の妻は、難をのがれ比企の地で員茂を産んだ。

その員茂は正法寺別当に養育され順徳天皇に仕え北面の武士になったと伝えられている。



正法寺仁王門にて住職さんを囲んで



判官塚

⑤安楽寺(吉見町)

安楽寺(吉見観音)は真言宗智山派で、源範頼ゆかりの地である。(前に述べた通りである)。



安楽寺三重の塔



安楽寺本殿中央高島先生

⑥扇谷山宗悟寺(東松山市大谷)

江戸時代、この地を知行していた旗本森川氏の菩提寺で曹洞宗の名刹である。新編武蔵風土記稿にも頼家生害から森川氏と大谷山寿昌寺の関わりも記している。

その後森川氏により今のこの地に扇谷山宗悟寺として中興したと言われ、頼家の位牌が祀られている。(但し、6月1日の訪問、視察では頼家の位牌を確認する事が出来なかった)。

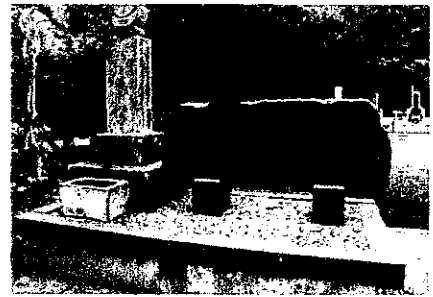
後述:平成23年11月号「ひがしまつやま広報・ちょっとより道」の誌面で【比企氏ゆかりの宗悟寺】の記事が掲載されている。その中で、源頼家の位牌が宗悟寺に残されている事を知り、住職さんに確認し、「頼家の位牌」を撮影させて頂いた。



扇谷山宗悟寺本堂



頼家の位牌



比企一族顕彰碑

⑦遠宗と比企尼の館跡(滑川町)

比企郡滑川町和泉三門(みかど)が遠宗・比企尼夫婦の屋敷跡と言われている。この館より流人の頼朝に支援を続けたと言われている。比企の尼はその後頼朝に慕われ鎌倉に移り住むが、その地名、川、橋等に「比企」「滑川」「和泉」のゆかりの名をつけたと伝えられている。



遠宗夫妻の屋敷跡(小山と小山の間)

参考:①蔵人くらんど所衆(平安初期に置かれた役所、天皇に近侍し、伝宣・進奏・儀式その他宮中の大小の雑事を掌る)。

②得宗家(徳宗) (北条義時の法号を徳宗といったのによる)。

③権守ごんのかみ(仮に任官すること)。

④補任ほにん(職に補し官に任ずること)。

⑤掃部允かもんじょう(平安時代、律令制の四等官、次官の下の役人)。

⑥目代もくだい(平安・鎌倉時代、国守の代理となって任国に赴き、事務を取り扱った役人)。

7. 伝承と伝説

7-1大谷

① 比丘尼山と寿昌寺跡

扇谷山宗悟寺の西方約 500mの所に、「比丘尼山」と呼ばれる市指定史跡の女性的な美しい山がある。その昔、比企遠宗郡司の妻比企の局が、夫遠宗没後尼となって草庵を結んだ所と伝えられている場所である。



比丘尼山

また、「郡村誌」には、この比丘尼山について、「高一丈周囲八町村の西にあり、往時源頼家伊豆国修禅寺に於いて^{こう}薨せし時、若狭の局遺骨を^{ほう}奉し此村に來り、遺骨を^{ほうむ}葬り庵を結び居住せしにより、庵を修善寺と呼び比丘尼山と呼ぶと口碑に伝う・・・」若狭の局が建立したと伝える「大谷山^{だいこくさんじゅしょうじ}寿昌寺跡」は、この草庵址に程近い北の小高い丘陵で、その麓に源泉沼と言う沼があり、この辺から南が主膳寺と呼ばれる地域である。参考：口碑(昔からの言い伝え・伝説)。

②城ヶ谷と比企能員館跡

^{らいでんやま}雷電山の真南にある奥深い谷が、いわゆる城ヶ谷で「埼玉県史」や「埼玉の神社誌」には、ここに比企能員の館があったと記しており、口碑もそのように伝えている。

しかし、残念ながら、今だその館跡は発見されていない。確かに、この地は鎌倉の比企ヶ谷によく似た地形で、^{なかうちで}中内出と呼ばれる最も早くから開かれた地域にあり、谷の北から東に連なる丘陵には、多くの住居跡とその祠が残り、黒色の見事な骨壺二個が発見されている。尚、明治年間には、その一角で立派な鎧兜と銘刀二振りも発見されており、その近くには「天下屋敷」と呼ばれる屋敷跡や井戸などが残っていた。また、比企氏の乱後、若狭の局に従って落ちて来た^なと伝える頼家の側近の子孫が住み、現在も続いていると云う。

③梅ヶ谷と若狭の局

宗悟寺の南約 400mの所に梅ヶ谷がある。ここはその昔、若狭の局が隠棲した所と伝えられている。この谷は、東方から南西へと丘陵が続き、汲めども尽きない清らかな泉の湧く、暖かい日だまりの地で、昔の梅の古木の多い美しい花園であったと言われ、夫を失った若狭の局が、比丘尼山の草庵から移り、静かに余生を送るのに絶好の地であったと思われる。

④伝説「若狭の局と串引沼」

比丘尼山に隣接して、東の谷の奥深く、串引沼というこの地域第一の大沼がある。

「郡村誌」には、この沼を「奇比企沼」と記しており、次の様な伝説が伝わる。「その昔、比丘尼山の草庵に住み、夫頼家の菩提を弔っていた若狭の局が、祖母の比企の尼の勧めで、心の迷いを去る為に、鎌倉より持参して肌身離さず持っていた夫頼家からおくられた鎌倉彫りの櫛をついに捨てようと心に誓い、夜の明け染めた早朝、朝の勤行を済ませ、祖母と二人連れだつてこの沼に行き、形見の櫛を投げ入れました。

櫛はかすかな水音を残して沼底深く沈み、その姿が見えなくなった。局はもちろん、比企の尼の両眼からも涙がとめどなく流れ落ちた。時は元久二年(1205)7月半ば、夫頼家の命日に当たる日であったと云う」。この様に伝わっているが、これは伝承であり、実際には若狭の局は一族と共に焼き殺されている。可能性があるとするれば、頼家正室の辻殿(公暁の母)だろうか。



串引沼

7-2岩殿

①判官塚

判官塚は比企判官能員の追福のため、築きしものと言ひ伝う。その由来は新編武蔵風土記稿に記されている。建保六年(1218)頃、岩殿山に居た能員の孫、員茂は、観音堂の東南の地、南新井に塚を築き、能員の菩提を弔い、祠堂を建て、刀一振を修めしゆえの遺跡なり。尚、地元の方は「はんがんさま」と親しみを込めて呼んでいたと伝わっている。「はんがんさま」とは「判官塚」のことらしい。鳥居には「比企大神」とあり、塚は大東文化大学キャンパス造成時に移転したそうである。

②伝説「くつわ虫」

東松山市の「伝説と夜話」に「くつわ虫」と題して、次の様な伝説が残っている。要約すれば、ここ岩殿の里には、秋の夜に欠かせない風物の一つであるクツワ虫が、不思議と住みつかない。それは、建仁三年(1203)9月末の夜の事、ここ岩殿山正法庵に、人目を忍んだ尼僧姿で訪ねて来た落人があった。それは、比企時員の妻とその下人で、庵主の計らいで正法庵のかくまい人となり、正法庵の向いの谷間の小庵を仮の住まいと定めてひっそりと隠れ住んだ。

庵主は大恩人であるこの尼僧を守る為、寺男に命じて、岩殿山のクツワ虫を残らず採り根絶やしにしてしまった。それは、クツワ虫は不思議と人の気配を敏感に感知する虫なので、これによってかえって人の住んでいるのを覚られてしまうと考えるのことであった。こうして、時員の妻は無事男児を出産した。

翌年、夫人はこの男児を寺に預け、一門の冥福を祈る為、西国への巡礼の旅に出ていった。この男児が員茂でこの寺で育てられ、やがて順徳帝に仕えて越後の寺泊に行き、寺泊兵衛と称したが、其の子員長を伴って川島町中山に来たと伝えている。

8. 「まとめ」

北条氏の陰謀に依って、滅ぼされた比企一族の形跡は殆んど残っていないだろうと思いながら、一族に関する資料・文献を漁り、また、史跡等を訪ねては、往時の事柄に想いを馳せ、その足跡を追った一年間だった。

比企地方の郡司として、派遣されてきて百年余り、源氏との繋がりからやっかみの目で観られこそすれ、比企地方の土着性と云う点からすれば、地方豪族との縁がやや薄かったのであろう。その根なし草的な弱みが比企氏の最大の弱点だったのではないだろうか。三浦氏や北条氏のように、血で血を洗う戦いには向かなかつた比企氏は、非常に真心のある、文化的に高い、素晴らしい一族であるが故に、余りにも上品すぎたのかもしれない。

鎌倉幕府創立に力を注ぎながらも、頼朝没後を契機に滅亡への道を歩んでいった一族も、乱後生き残った比企能本は、父母の菩提を弔う為、比企ヶ谷に妙本寺の前身となる法華堂を創建した。又、仙覚律師は、「万葉集注釈」に大きな功績を残し、「万葉集の祖」と尊ばれている。他には島津家の祖と呼ばれる島津忠久等を輩出し、今日まで其の子孫は脈脈と続いている。

この度の課題研究においては、岩殿安楽寺島本住職、ときがわ町慈光寺佐伯名誉住職、川島金剛寺長井住職、岩殿正法寺中嶋住職、宗悟寺雲井住職さん方には、御多忙のところ懇切丁寧の説明して頂き、心より御礼申し上げます。また、講師をお願いした高島敏明先生には、課題研究全般に亘りご指導頂き、お陰さまで完成させる事が出来、B班一同感謝致しております。

最後に、高島先生とご一緒に「比企一族顕彰会」を立ち上げられた、今は亡き関根茂章先生の言葉を以って結びと致します。

「真の郷土の振興は、先人の遺風、業績を新たに掘り起こすことから始まる。

過去を継承せずして、健全な未来の創造はあり得ない」

9. 「参考資料・訪問施設」

- ・新編武蔵風土記稿
 - ・東松山市の歴史 上巻
 - ・吉見町史 上巻
 - ・小川町史 上巻
 - ・東松山市の地名と歴史
 - ・慈光寺
 - ・東松山史話
 - ・比企年鑑
 - ・甦る比企一族
 - ・比企遠宗の館跡
 - ・武蔵武士とそのロマンと栄光
 - ・武州吉見の人物史
 - ・妙本寺・鶴岡八幡宮(鎌倉)
 - ・安楽寺・息障院(吉見町)
 - ・宗悟寺・串引沼(大谷)
 - ・慈光寺(ときがわ町)
 - ・金剛寺(川島町)
 - ・正法寺(岩殿)
 - ・仙覚律師遺跡顕彰碑(小川町)
 - ・泉福寺(滑川町和泉)
- ・インターネット・フリー百科事典「ウィキペディア」活用。

10. 郷土学部 課題研究B班 活動記録

回	月日	場 所	内 容
1	2/25	きらめき大学	メンバー顔合わせとテーマの設定
2	3/11	きらめき大学	メンバー役割分担と講師の検討及び自主会合日設定
3	3/28	きらめき大学	連絡網の配布と今後の予定表配布(訪問先含む)&比企一族の歴史等レクチャー
4	4/11	きらめき大学	高島先生の講義と「比企三姫」のお酒の紹介・寄贈
5	4/25	きらめき大学	原稿作成自由討議と郊外研修検討
6	5/23	鎌倉地区	郷土学部&史跡探訪クラブ合同鎌倉探訪(妙本寺等)
7	6/1	吉見・大谷地区	現地見学と聞きとり調査等(高島先生同行)
8	6/13	きらめき大学	今後の郊外ミーティング&7月・夏休み中の自主会合日
9	6/22	都幾川・小川地区	現地見学と聞きとり調査
10	6/28	川島・岩殿地区	現地見学と聞きとり調査(滑川町和泉の泉福寺)
11	7/11	きらめき大学	自主会合日。原稿提出に対する方向性について
12	7/13	きらめき大学	課題研究日。原稿担当部門の割り振り
13	7/25	きらめき大学	自主会合日。文章作成骨組みについて協議
14	8/3	きらめき大学	自主会合日。原稿作成に向けて各担当者話し合い
15	8/31	きらめき大学	自主会合日。原稿提出日/各担当部分読み合わせ
16	9/7	きらめき大学	課題研究日。各担当者の原稿ページ調整
17	9/28	きらめき大学	課題研究日。作成資料の検討
18	10/5	きらめき大学	自主課題研究日。作成資料読み合わせ及び誤植検討
19	10/25	きらめき大学	自主会合日。作成資料校正(高島先生同席)
20	11/9	きらめき大学	課題研究日。作成資料校正(最終)



高島先生を囲んで



安楽寺駐車場にて説明を受ける



泉福寺にて



金剛寺でお茶をご馳走になる